

第6室 絵画—仏画 展示解説

今回の12幅の仏画は、もと仏画写経貼交屏風2隻に貼られていたものを改装したものである。

N3-1-1 聖徳太子および五臣像（しょうとくたいしおよびごしんぞう）

天蓋（てんがい）下の太子を、3人の僧侶と束帯姿の2人の人物が取り囲むように坐っている。各人物には短冊形が添えられているが、文字は不明。修理前、欠失部分には弘法大師像とみなされる他の絵から転用された絵絹が補絹として使われていた。

N3-1-2 阿弥陀来迎図（あみだらいごうず）

画面左上から阿弥陀如来と三体の菩薩が飛雲にのって、画面外にいると思われる極楽浄土に旅立とうとしている臨終の人を、お迎えに舞い降りてくる場面を表したもの。構図や阿弥陀如来の姿勢、如来や菩薩の体を白く塗る点など、来迎図が定型化する以前の古様な要素がみられるのが特徴的である。

N3-1-3 釈迦三尊十六羅漢図（しゃかさんぞんじゅうろくらかんず）

蓮華座（れんげざ）に、頭光（ずこう）をともなった釈迦が、足を組んで坐り、左右には普賢（ふげん）菩薩と文殊（もんじゅ）菩薩、さらには十六羅漢が囲んでいる。釈迦の袈裟などには、金箔を細く裁断した截金（きりかね）で麻葉繫（あさはのつなぎ）や卍繫（まんじつなぎ）などの文様が非常に細かく表わされている。

N3-1-4, 3-2-1 不動明王二童子像（ふどうみょうおうにどうじぞう）

海上の岩座に荒々しい形相の不動明王が、その変化身である矜羯羅（こんがら）童子と制吒迦（せいとか）童子を従えている。不動明王の光背は、上方で激しく渦巻く火焰（かえん）が特徴的である。

N3-1-5 釈迦三尊像（しゃかさんぞんぞう）

獅子をともなった六角台座に、頭光（ずこう）と身光（しんこう）を背負った釈迦が、蓮華座に足を組んで坐り、前面向かって左には知恵をつかさどる文殊（もんじゅ）菩薩、右には修行などをつかさどる普賢（ふげん）菩薩を表わす。釈迦および二菩薩の着衣の文様や蓮華の花弁の脈には、金泥や金箔を細く裁断した截金（きりかね）が使われている。

N3-1-6 愛染明王像（あいぜんみょうおうぞう）

蓮の花の台座に足を組んで坐る赤肉身の愛染明王で、3つの目に、6本の手のそれぞれに持物を持った三目六臂（さんもくろっぴ）の怒りの荒々しい形相で表わされる。下方には蓮華座にのる火焰宝珠（かえんほうじゅ）などの七宝が散りばめられている。

※裏面に続く

N3-2-2 弥勒菩薩像（みろくぼさつぞう）

頭光（ずこう）と身光（しんこう）を背負い、蓮の花の台座に左足を踏み下げて坐る弥勒菩薩像を表わす。色鮮やかで生々しい彩色などから、制作年代はかなり降り、江戸時代幕末の基準作例に近い作風が感じられる。

N3-2-3 文殊菩薩像（もんじゅぼさつぞう）

正面を向き、大きな口を開けたいかめしい獅子に乗る文殊菩薩を表わす。子供のような顔をした童子形（どうじぎょう）の文殊菩薩は、頭光（ずこう）を負い、蓮の台座に乗った形で表わされる。彩色とともに金泥や銀泥、金箔を細く裁断した截金（きりかね）などが用いられている。

N3-2-4 千手観音二十八部衆像（せんじゅかんのんにじゅうはちぶしゅうぞう）

千本の腕を持って人々を救うといわれる岩上の千手観音を中心に、左右に各 13 体の眷属が従い、さらに画面向かって上方右に雷神、左には風神が飛来する。観音の手数は、中央で合掌する手も含めると、四十二手を数える。彩色も比較的よく残っている。なお、修理に際し、旧裏打紙に二十八部衆の尊名を墨書した短冊が確認された。

N3-2-5 阿弥陀三尊来迎図（あみださんぞんらいごうず）

阿弥陀如来および観音・勢至（せいし）菩薩が雲に乗って来迎する場面を表わす。如来の肉身や衣などは金泥で塗られ、頭光は金箔を細く裁断した截金（きりかね）線に金泥で暈しを添えており、当初の華やかさがしのばれる。

N3-2-6 釈迦如来像（しゃかによらいぞう）

蓮の花の台座に足を組んで坐る釈迦如来を表わす。釈迦は頭光と身光を負い、身にまとう袈裟は朱色の地に金泥で雷文繫（らいもんつなぎ）を、蓮華座の輪郭と葉脈には、金箔を裁断した太く粗い截金（きりかね）を用いる。六角形の台座にも、ぼかしの纒縹彩色（うんげんさいしき）や金泥が随所に残っている。

第6室 染織

—蜀江錦褥と綾の幡足—

「蜀江錦」(しょっこうきん)は、奈良・法隆寺に伝えられた飛鳥時代を代表する錦の一群です。赤い色をベースとした鮮やかな錦であり、今日でも茶道具や帯、ネクタイなど、さまざまな染織分野でそのデザインが好まれています。この錦は経錦(たてにしき)という、多色に染められた経糸の浮き沈みで文様を表す技法で織られています。これは古墳時代から飛鳥時代にかけて行われたもので、奈良時代になるとあまり見られなくなる古い技法です。

また併せて、様々な文様を織り表わした綾の幡足を展示します。飛鳥から奈良時代にかけての華やかな染織美術をご覧ください。

N-43：蜀江錦褥残欠(しょっこうきんじょくざんけつ)

褥(じょく)と呼ばれる敷物に使われていた蜀江錦です。鮮やかな赤地に亀甲繫文を配し、その中に花や鳥、犬のような動物などを納めています。古代の錦は同じ文様のくりかえしで全体を構成するのが一般的なのですが、この作品の場合、織幅をなす横一列の文様に同じものが無いのが特徴的です。

参考：幡足とは

幡は仏像の頭上やお堂の内外に懸けた旗のこと。形は人体のように、頭に当たる幡頭(ばんとう)、胴に相当する幡身(ばんしん)、足の幡足(ばんそく)からなっている。特に幡足は带状の裂をずらしながら複数下げたもので、風をはらんで舞うように作られています。

N-319-61-2：赤地平絹幡足残欠(あかじへいけんばんそくざんけつ)

N-319-63-1：赤地平絹幡足残欠(あかじへいけんばんそくざんけつ)

N-319-102-3：赤地平絹残欠(あかじへいけんざんけつ)

ぼろぼろの残欠と化しながらも、その色彩はついこの間染められたかと思うほど鮮やかです。赤い染料が特に退色しやすいことから考えると、この色の保存の良さは驚異的であり、いかによい材料用い、手間暇をかけて染められたかがわかります。

N-319-75-1：黄地山形文綾幡足残欠

(きじやまがたもんあやばんそくざんけつ)

N-319-87-1：淡黄緑地山形文綾幡足残欠

(うすきみどりじやまがたもんあやばんそくざんけつ)

法隆寺の幡のうち、特に古様なものは山形文などの幾何学模様を表わしたもので、そこに

は我が国における初期段階の綾織り技術がみられます。

N-319-89-3：黄地亀唐花亀甲繫文綾幡足残欠

(きじかめからはなきっこうつなぎもんあやばんそくざんけつ)

この綾も幾何学文様の一つで、亀甲繫のなかにある愛嬌のある亀と意匠化（いしょうか）された唐花文を平地変り綾文綾という技法で織り出しています。この綾は、正倉院にはほとんど類例をみない法隆寺独特のもので、大変貴重です。

N-319-108 淡黄緑地入子菱繫文綾幡足残欠

(うすきみどりじ いりこびしつなぎもん あや ばんそく ざんけつ)

菱形を幾重にも重ね、連続させた綾文様です。織り間違えにより、文様の形は不規則で、古代のおおらかな文様の面白さを伝えています。

N-319-113 淡紅地亀甲繫文綾幡足残欠

(うすべにじ きっこうつなぎもん あや ばんそく ざんけつ)

亀甲を並べた文様の綾。同様の幡足は広東綾大幡（N-24）にもみられ、およそ7世紀後半の制作と考えられます。

N-319-161-1 黄地山形文綾幡足残欠

(きじやまがたもんあやばんそくざんけつ)

N-319-165 黄緑地山形文綾幡足残欠

(きみどりじ やまがたもん あや ばんそく ざんけつ)

三角形をつらねた山形文を細かく織り出した綾の幡足です。平地浮文綾や平地綾文綾という綾のなかでも古式な技法が用いられ、わが国における初期の綾文様を見ることができます。